

朝比奈大作 監修（司書教諭テキストシリーズII）
中村百合子 編集

『学校経営と学校図書館』

樹村房 2015年12月 A5判 224頁 ¥2160（税込）

足立正治

本書は、司書教諭養成のために大学等で使用されることを目的としたテキストである。司書教諭資格取得に必要とされる五科目のなかで「学校経営と学校図書館」は、一言でいえば、学校図書館を学校の教育活動に不可欠な存在として位置づけ、機能させるための科目である。だが、大学の司書教諭課程や司書教諭講習などでこの科目の授業を担当していると、テキストが目ざす学校図書館像と学校現場との乖離を感じる人が多い。講習で学んだことを現場で活かすための条件が十分に整っていないのである。兼務の司書教諭として「学校図書館の専門的職務」を十分に果たす時間的余裕がない。学校図書館が学校経営の要として組織的に運営されていない。探究、協同、創造といった活動を促進する学校図書館の認識が教職員間で共有できていない。学校司書の配置もままならないなか、なんとか時間を見つけて頑張っておられる先生たちも、図書の整理や施設の維持・管理といった技術的な仕事をこなすことで精いっぱい、生徒一人ひとりの問題や欲求に寄り添い、多様なメディアを活用して情報の評価力や判断力を高めるといった、きめの細かい教育活動を展開するところまでは手がまわらない。こうした状況を打開して新たな学校図書館活動を創出できる司書教諭の養成が望まれる。

一方、大きく変動する国際社会にあって、来るべき社会の担い手を育てる公教育のあり方を問い直す動きが世界規模で始まっており、21世紀の学習者を育むという観点から学校図書館の役割を捉えなおす試みも行われている。こうした動向を踏まえて、これからの司書教諭養成課程では何をどのように学ぶべきかが問われている。

本書は、従来のテキストとは異なり、こうした

問題意識に応じて新しい時代の司書教諭の養成をめざすテキストの先駆けとなるだろう。以下、大学の授業に合わせて15章に分けられた各章を追って本書の構成を概観する。

第1章「司書教諭になるための学習」は、本書の編集方針と学び方、とくに理論的学習の重要性を説明して、学習の心構えをさせるガイダンスとなっている。

つづく第2章「福島第一原子力発電所事故後の世界と新しい知的社会」、第3章「これからの学校教育とあるべき学びの形」、第4章「メディアと人間の循環」では、来るべき知識社会を展望し、これからの学校教育の在り方と変革の必要性を論じ、探究と教育をサポートする「知の自律的循環」の場としての図書館の概念が提示されている。本書はここで提示された理論や概念を軸に展開されており、必要に応じて、章を超えて相互に参照され、理解と考察を深める配慮がなされている。この三章は教育哲学者の河野哲也氏が執筆しておられる。

こうした下準備を経て学習者は、第5章「学校の中の図書館」で学校図書館の理念へと導かれる。

第6章と第7章では、アメリカと日本の「学校図書館の歴史」が章を分けて論じられており、わが国の学校図書館がアメリカの影響を受けながら異なる発達過程をたどってきた経緯を理解したうえで、第8章「日本の学校図書館の現状」を把握し、今日の学校図書館が抱える矛盾や問題を克服して新たな制度と実践を切り開いていくための考え方を学ぶ。歴史的考察は、「知」と「学び」と「メディア」に関する理論とともに、本書において、長期的な展望をもって学校図書館の現状を改善するための重要な柱となっている。

ここまでの理論を踏まえて、第9章「学校図書館の目的と機能」、第10章「学校図書館の図書館サービス」と第11章「学校図書館の教育活動」では、学校図書館で行われる諸活動が示されている。こうした活動の原動力となってその成否のカギを握るのが第12章「学校図書館の担当者」である。この章で学習者は、学校図書館の職員制度の複雑な背景とともに、充て職として「学校図

書館の専門的職務」を掌ることが期待されている司書教諭の厳しい状況を知る。ただ、「職員制度を根本から再検討することが喫緊の課題」(p.156)であることはたしかだが、これから司書教諭資格の取得を目指す学生にとっては、実際に学校に就職し、与えられた条件の下で、どのようにすれば司書教諭としての職務を全うしていく道が開かれるのが喫緊の課題であろう。

こうした理想と現実の溝を埋めるカギになるのがマネジメントの力である。組織の目的を達成するために、現実を見据え、目的をもって、現状を改善していく力といってもいい。その意味で、第13章で「学校図書館のマネジメント」を学ぶことは意義がある。

マネジメントは基本的にマーケティングとイノベーションの二つ要素で成り立っている。学校図書館にあてはめていえば、マーケティングとは、利用者（教師と児童生徒）を知ることである。それは、単に利用者のニーズにこたえて利用を増やすために行うのではない。利用者を知って、学校図書館の「サービス」と「教育」を利用者に適合させ、学校図書館の理念と使命を実現するために行うのである。そのためには、まず利用者を理解し、学校図書館の目的と使命を明確にして、利用者に働きかけ、そのフィードバックを受けて自らの行為の結果を省察し、新たな意思決定と実践を行う。このマネジメント・サイクルは、学校図書館の自己変革（イノベーション）のサイクルであると同時に、学校図書館担当者の学びのサイクルでもある。組織を有機的に機能させることは、人を有機的に機能させることであり、それには日常的なコミュニケーション(対話)を基盤とした教職員間の同僚性の構築と、たえざるフィードバックによって利用者との間に相互の学びの回路が開かれていることが重要である。

だが、残念ながら従来のテキストにおいて、こうしたマネジメントの本質と意義が具体的かつ的確に示されているとはいえない。学校図書館が学校の経営組織にどのように位置付けられ、どのようなマネジメントが行われるのか。学校図書館がその目的と機能を十全に果たすために、どのよう

なプログラムをどのように立案し、展開していくのか。理論を実務に活かすには、そういった学校図書館の経営プロセスを具体的にイメージできるようになる必要がある。

第14章の「学校図書館の設計」では、単なる快適さだけではなく、利用者の活動の可能性を広げる環境のアフォーダンスという概念を取り入れている点が注目される。学校図書館が場所としてのアフォーダンスを高めることで、ヒトとモノがかかわりあって発展していく学習環境が形成されることを期待したい。そのためには、フロア・プランやレイアウトといった物理的な空間配置だけでなく、図書館担当者、利用者、図書館運営のプログラムと、さまざまなメディアやツールが相互に関わり合って発展していく、総合的な学習環境のデザインを学ぶ必要があるだろう。

そして最終章、第15章「学校図書館研究と学校図書館の発展」というタイトルにも、学校図書館の発展は理論的な探究をとまなう実践をとおしてこそ可能になるという、本書の一貫したメッセージが込められている。ここでは、社会や学校教育が直面している状況に学校図書館が柔軟に対応し、多様な機能を果たすために、現状を批判的に見つめ、問題を発見し、解決をはかることのできる司書教諭像が語られている。

このように本書を概観すると、その編集方針に照らして各章のテーマの設定と配置が的確で、全体の構成に配慮が行き届いていることがわかる。しかし、その一方で、理論が先行し難解である、具体的な学校図書館のイメージが描きにくいといった批判があるかもしれない。もしそうなら、本書の難点を克服し、その理念を生かすために授業担当者にゆだねられる役割は大きい。学生の意識や理解に応じた丁寧な導入と励まし、具体的な実践事例の紹介、学習過程における適切な探究課題の提示や介入を心がけ、学生が受講前に描いていた「学校図書館の勉強」に対するイメージとの隔たりに心が折れないように導くことで、彼らが本書の理解を深めてくれることを願うものである。